第4章

イランの工業と地域性

——ヤズド州の繊維産業についての研究——

はじめに

イラン経済は，革命以前，すなわちパフラヴィー朝末期から停滞しており，特に製造業部門でこの傾向が顕著であるといってよいだろう。その証拠はイランの国内総生産(GDP)に占める製造業部門のシェアが，ここ数十年にわたって10%前後をキープし，変動がないことに端的に示されている。また後述するように製造業部門内部でも部門ごとの差は激しく，例えば，重工業部門重視の政策は，繊維・織物部門にしわ寄せを与えている。

本章は，特に革命後のイランにおける一地方の産業構造を国民経済とのかかわりのなかで分析し，地方からイラン工業の問題点を探ろうとしたものである。具体的には，繊維・織物産業に特化したヤズド州を対象とする。このヤズド州はイランでも有数の繊維産業の盛んな地域であるのだが，その構造を仔細に検討すると，今後のこの地域の発展を阻害しうる脆弱さが浮かび上がる。

手順としては，まず次節で，工場の規模と立地という本章の二つの視点について明らかにしておく。次いで，イランという国民国家に占めるヤズド州の地位を第2節で確認しておく。その上で，第3節と第4節で工場規模という視点から，第5節で立地という視点からヤズド州内の繊維産業構造とその

問題点を検討する，という作業手順を踏むことにしたい。

第1節　視点と対象

1．二つの視点

(1)　イランにおける工場の規模

イランの『鉱工業センサス』(1995年) では，工場を従業者規模に従って，(1)「6人未満」，(2)「6～9人」，(3)「10～49人」，(4)「50人以上」と四つに階級区分しており，それを示したのが表1である。確かにこの区分は便宜的なものであるが[1]，この表からはイランの工業がかかえる問題をいくつか読みとることができる。

まず第1に，工場規模の偏りに着目できるが，これは中小工場が未発達であることを示している。つまり，工場数ベースでは従業者数「6人未満」の零細工場のシェアが91.6%と圧倒的である。この規模は工場生産というよりは家内工業，コテージ・インダストリーと称すべきものであろう。一方，従業者数ベースでみた場合にも「6人未満」の零細工場 (41.8%) が最多であることに変わりはないが，今度は「50人以上」の区分もそれに匹敵する規模(38.8%) を構成している。この「50人以上」の区分に含まれる従業者数を工場数で

表1　イランの製造業部門の工場規模

従業者規模	工場数	%	テヘラン州	ヤズド州	従事者数	%	テヘラン州	ヤズド州	繊維産業：全国*	
									工場数	従事者数
6人未満	334,630	91.6	86,090	6,164	702,204	41.6	210,446	10,927	40,212	83,029
6～9人	17,403	4.8	7,459	239	123,171	7.3	53,568	1,779	2,012	14,476
10～49人	10,985	3.0	4,287	286	210,727	12.5	78,521	5,482	1,383	25,728
50人以上	2,263	0.6	917	65	651,362	38.6	249,339	13,234	370	135,755

(注) * 参考。
(出所) Markaz-e Āmār-e Īrān, 1995, 各号より作成。

単純に割ると287.8となり，この階級内の平均規模はかなり大きいことになる。しかしながら，この両者の間に位置する区分，すなわち中小工場はやはりふるわない。

この状況からは，零細工業(またはそれを統括する問屋)の一部が拡大して中小工場になること，あるいは大工場が一部の工程を中小工場として分離し，下請け化することによって中小工場を生み出すこと，そのいずれも進展していないことが看取される。中小工場の未発達という状況は，多くの途上国に共通する問題であって，とりたててイランの特徴であるとはいえないとしても，やはり工業活動の未成熟を示しているといえよう。また，日本においても中小工場（この場合は，300人未満）が全工場の99%を占める状況にあるが，やはりイランの工場規模は国の違いを考慮しても中小というよりは零細である。さらに，こうした工場という区分から脱漏する膨大な数の家内工業，家内作業所の存在も忘れてはならない[(2)]。

(2)　イランにおける工場の立地

表1に関連する二つ目のポイントは，地理的拡散が未発達ということである。すなわち，工場数ベース，従業者数ベースの両面で，そしていずれの階級においてもテヘラン州[(3)]のシェアは卓越的(全工場の27.0%，なお「6人未満」の区分を除けば41.3%）である。

工場の分散は地理的な偏りを示しているという単純な問題に帰してはならない。第1にそれは地域独自の経済的，社会・文化的諸資源の利用がなされていないという背後の状況をも多分に示しており，自発的な工業発展を議論の射程に入れるならば，地域的な資源の動員の問題としてとらえる必要がある。このような地域の資源動員に関する問題は，途上国においてよりはむしろ先進国において多く議論されてきているところである。例えば，欧州においてもEU域内の低開発地域における地域的な工業発展の可能性について盛んに論じられている。これは，「上からの」開発よりもむしろ自立的なローカルな経済的，社会・文化的次元を背景とする内生的工業化（endogenous indus-

trialization)を重視している[4]。つまり，地理的拡散がみられないということは，自立的な内生的工業化が未発達であるということを暗示している可能性が高い。こうした見方はイランについても参考になろう。

また，工業立地が局地的であるという性格は否めないが，大工業ないしそれに従属する部品組立工場の立地よりは，域内に一定の連関網を広げる地場産業のほうが地域波及効果の大きいことも事実である[5]。つまりこれは，有機的に結びついた中小企業群のことである。この点で，第1の問題と相互に関連づけて議論する必要と，工業の地理的な分布を問う必要性が生じる。

2．対象地域

こうした問題を検討するには，イラン全体，あるいは工業全体を分析することはマクロにすぎる。そこで，今回は特定工業に特化した，一地域に焦点を限定することにしたい。具体的には，繊維産業に特化したヤズド州ということになる。なお，この地域では，繊維関連の家内制工業や手工業も盛んである。本来，ひとつの地域を分析するのであればこれらの部門も近代工場制工業の動向と相互に関連づけて論じられるべき問題なのだが，今回は紙面の都合から分析の対象外とした。この点の謗りは容赦されたい。

第2節　イランの工業成長の軌跡
——重要な諸側面——

イランにおいては国家による工業政策は伝統的に重工業偏重の傾向が強い。しかしながら，政府投資は少ないものの，イランの繊維産業は，工業部門のなかでは生産額の点からも従業者数の点からも最重要な産業の一つであり，原料生産から仕上げ・加工工程，あるいは関連の機械・部品産業まで幅広い関連産業を含んでおり裾野も広い。また，地域密着型ないし後発国の工

業発展を考える場合に繊維工業が要であることは改めて述べる必要もあるまい。

こうした点から本章では，ヤズドというイランの一地域の分析に入る前に，イラン全体の工業政策と繊維・織物工業の動向と，ヤズド州の経済の動向を概観する作業を行っておく。

1．イラン工業発展の推移

(1)　重化学工業

イスラーム革命以前，政府は増えつづける潤沢な石油・外貨収入を工業部門へ投じ，欧米からの技術導入を足がかりに内需型の重工業主体の工業発展を国家的目標として追求した。この結果，1960年代央には食品，織物・衣料品といった軽工業が製造業全体の総産出高の70％以上を構成していた産業構造は，76年までには耐久消費財，中間財，資本財の生産で5割を占めるにいたった(Karshenas, 1990: 176)。ただし，量的な生産能力の拡大はまだしも個々の工業の生産性や品質ははなはだ低水準であった。また，外資との合弁も織物業のような軽工業部門ではあまり設立されることはなかった（Barkeshly, 1997)。

革命後はローカルな工業や基本的消費財（basic consumer products）の生産も発展の主要戦略の一つとされたが（Katouzian, 1981: 370-372)，やはりその重化学工業重視の姿勢は大枠では，旧体制の政策となんら変わりがない[(6)]。今日でも，政府による工業部門への投資は，主として石油・化学部門と金属・精練部門へ向けられている。革命後の第1次5カ年計画（1989～93年）における製造業部門の成長実績は，目標値（15.0％）を6ポイント下回った。にもかかわらず，期間中に粗鋼生産高は3倍弱，製銅2倍などと素材的重工業部門のパフォーマンスは大きく伸びており，このことからも重工業の重視ぶりがうかがえよう（Sāzmān-e Barnāme va Būdje, 1995: 10-16)。

また政府は，工業製品の輸出拡大を鼓吹してはいるが，現在の非石油関連

品目の輸出額は総輸出の1割前後のシェアをもつにすぎない。その上，こうした非石油輸出には，近代工業部門からの産品をほとんど含まず，最大のシェアは手織り絨毯が構成している（手織り絨毯は，イランの統計では「工業」ではなく，「農業・伝統」というカテゴリーに区分されることも多い)。

また，1989/90年に鳴り物入りで始動したキシュ島やケシュム島といった自由貿易地区に対する海外からの投資は過去5年間で3億ドルにとどまっており，外資誘致も停滞している。

(2) イランの繊維・織物工業[7]

イランにおける繊維業の歴史は古く，19世紀中期以降この部門から機械化・近代工業化が開始されることになった（Floor, 1991)。第2次大戦期には51の紡織関連の工場（そのうち41工場が綿紡織工場）があった。

下って1960年頃になると，イランの織物産業にはおよそ10万人が従事していたとされるが，そのうち，工場制工業部門の従事者は4万人にすぎず，残りは手機を生産手段としており，この期になっても工場制機械工業へのシフトは限定的であった。

1960/61年時点で工場制機械紡織部門には，合計56万3694紡錘，9533台の織機が装備されていた（Ministry of Industry & Mines, 1961: 27)。それが，70年代初めには，紡錘数は90万になり，織機と紡績機は合計1万7000台となる。さらに，80年代初めに紡錘数は140万程度，紡織機は3万5000台へと一本調子で成長していった（Harātī, 1997-98: 138)。工場規模からみた綿・化合繊織物の生産は，70年代初頭（1349年）では，62の主力大型工場による生産が総生産量の83％と圧倒的な部分を占め，さらに力織機を使用する800余りの中小零細工場が6％を，そして残り（11％）を手機織機による，という構造になっていた（Sādeqī, 1977: 19-21)。

当初，イランによる織物製品輸入は相当な規模であったが，生産能力の拡大とともにしだいに改善され，量ベースでは革命以前のかなり早い時期にほぼ輸入代替を達成しえた。具体的な時期を挙げるならば，綿・化合繊織物[8]に

関して国内生産量が輸入量を上回るのは，1956/57年になってのことであり，さらに63/64年以降は，国内生産量が国内総供給量の9割を超えるようになる(Sāzmān-e Barnāme, 1968: 34-35)。こうした成長の結果，70/71年になると織物輸入量は一時的にゼロとなった[9]。

一方，イランの機械紡績部門は，織布部門が自給率を向上させた1960年代初頭にはすでに，量ベースではイランの機械織物部門で消費される量（4万5000トン）をはるかに上回る生産能力（7万7000トン）を有していた。英国の産業革命を端緒として繊維産業の発展は部門間で跛行的な状態を示すのが常であるが，イランの場合も紡績部門が，織布部門と不均等に成長したわけである。ただし，ポリエステル糸やアクリル糸などの合成繊維の生産は遅れ，現在でもイランの合繊の生産能力は，ナイロン糸2万6000トン，ポリエステル糸2万トン程度にとどまっている（Harātī, 1997-98: 136)。産油国でありながら化学や薬品工業といった石油資源を軸とした工業化戦略は実際のところあまり進んでいないのが実情である。

近代的な繊維産業の発展の遅れは他国に比較した場合，いっそう際立つ。繊維産業は，イランの近隣諸国でも最も重要な工業，および輸出部門となっている。例えば，隣国トルコ，パキスタン両国が，織物，衣料品の両部門で世界的に高い競争力を誇っていることを考えると（Singleton, 1997: 14-19)，イランの近代的な繊維産業部門の遅れは決定的である。また，輸出余力も限られている[10]。

本節の主張をまとめておけば，イラン工業の一般的特徴は，(1)製造業部門の停滞，(2)革命に関係なく政府による工業化政策は重工業中心，となる。さらに，繊維産業に限定すれば，(1)革命以前に一時的にではあるが綿・化繊織物生産は量ベースでは自給をほぼ達成，(2)しかしながら，繊維産業の近代化・機械化，あるいは輸出化の進展は遅く，近隣諸国と較べても低水準，となる。

それでは次に扱うヤズド州はこうした全体的な傾向と異なるのであろうか[11]。

2．イラン工業に占めるヤズド州の位置

(1) イラン州の概要

ヤズド州はイランを構成する29の州（1999年現在）のひとつであり，内陸の乾燥地帯に位置する（図3）。かつては地の利を生かしイラン内陸部とペルシャ湾をつなぐキャラバン・ルートの主要中継地としてのみならず，交易向けの絹産業を中心とする手工業も大いに栄えた。現在（1997年）のヤズド州の基本的なプロフィールを確認しておけば，面積は7万5000平方メートル（イラン国土の4.27％：北海道の面積の9割弱），人口は74万6000人（総人口の1.2％：北海道の1割強）にすぎず，イラン全体に占める比重はきわめて小さい。工業部門（表2）にしても，全体に埋没してシェアは目立たないが，それでも人口に比較すれば比率は高まる。

また，農業生産に関しては，イランの主要作物である小麦や甜菜，綿花もヤズド州の生産量はどれも全国シェアの1％に満たない。この地域は，気候的な制約から農業には不適であり，その意味で人口支持力はかなり制約される。しかしながら，農業で人口を養っていく不利さは，資源の配分を工業へと振り向ける可能性をもっている。よって工業への特化が進展する可能性があり，実際に手工業段階での工業生産はイランでも有数の段階に達していた[12]。

表2　全国とヤズド州の比率（1997年）

（単位：固定資本額は10億リヤール）

	全　国	ヤズド州	%
工場数	43,657	1,484	3.4
従業者数	1,021,609	42,748	4.2
固定資本額	29,851	1,014	3.4

（注）工業総局が監督官庁となっている工場のみ。
（出所）Edāre-ye Koll-e Sanāye‘-e Ostān-e Yazd, 1998, p. 20より作成。

(2)　産業構造と人口増加

伝統的にイラン経済に占める農業部門のシェアは他の部門を圧して重要であるが，ヤズド州の場合は若干様相が異なる。もちろん，ヤズドの総就業者に占める農業部門の割合は高く，1967年時点では工業と並んで3割を超えていた。しかしながら，年を追うごとにその比率を低下させ，87年には18%と2割を割り込む。

工業部門は，農業部門を抑えて1967年には最大の部門(39.4%)を構成していた。しかし，87年には23.6%に低下している(ただ，97年には30.7%に上昇)。就業者数のシェアの点からいえば，ヤズド州においても工業化の挫折(ディ・インダストリアライゼーション)を示していることになる。現在の最大の部門は，サービス部門であり，また建設業もかなり高いシェア(87年：15%，97年：11.2%)を占めている。かつてのヤズドの産業構造は，工業部門が農業部門を上回る格好であり，イラン全体に比べて特異な姿であったが，今ではイラン全体の平均的な姿に近づいたといえよう。

この変化の最大の要因は，人口増加にある。1977年には38万人強であったヤズド州の人口は，87年にはその1.6倍に，さらに97年には2倍の75万人余りになっている(77～87年の人口増加率：4.9%，87～97年：1.9%；なお，イラン全体では，79～89年の年間平均増加率：3.9%)。しかも，農村部の人口は最近ではマイナス基調に転じており，77年時点では農村部に総人口の40%が所在したものの，97年では25%を割り込み減少傾向に歯止めがかからない。この人口増加を積極的に吸収しうるのは，農村人口が過剰であり，工業部門が狭隘なイランにあっては多くの途上国の事例と同様に都市部のサービス業や建設業しかないのは必定である。このためヤズド州の州都ヤズド市の人口は現在(97年)32.7万人となり，ヤズド州総人口の44%を占めるにいたった(Sāzmān-e Barnāme va Būdje-ye Ostān-e Yazd, 1998: 50)。

(3) ヤズド州における繊維・織物部門の重要性

1995年の『鉱工業センサス』によれば，ヤズド州の製造業関連の工場数（表1）は，全国シェア2.0%を占めるにすぎない。また，従業者数「50人以上」の工場の比率でみた場合には，3.6%といくぶん上昇するが，やはりこうした大工場は地理的にみればテヘラン州に全体の40%が集中しており，ヤズドを含めて他地域には少ない。

とはいえ，個別にみればシェアの高い部門も散見される（表3）。つまり，ヤズド所在の繊維関連部門で全国シェアが高いのは，紡績・織物部門（7.4%）と機械織り絨毯・モケット部門（12.0%）の両者である。さらに，「50人以上」の工場に限定すると，シェアが10%を上回る部門の数はかなり増す（逆に，「1000人以上」という最大規模の工場になると再びヤズド所在の工場は少なくなる）。

ヤズド州内部の工業構造も，繊維・織物（「織物，衣料品，履物」）工業への

表3　繊維関連

		労働者なし	1名	%	2名	%	3～5名	%	6～9名	%	10～19名
紡績・織布	全国	3	2,762		1,074		965		391		242
	ヤズド州	0	227	8.2	76	7.1	51	5.3	11	2.8	25
織物の染色・仕上げ加工	全国	0	679		436		468		103		50
	ヤズド州	0	23	3.4	18	4.1	12	2.6	2	1.9	0
衣料品・小物製造	全国	1	7,669		2,733		575		318		38
	ヤズド州	0	271	3.5	69	2.5	14	2.4	4	1.3	3
機械織り絨毯・モケット	全国	1	4,620		5,996		6,039		839		401
	ヤズド州	0	64	1.4	44	0.7	14	0.2	2	0.2	1
手織り絨毯	全国	0	555		106		35		7		12
	ヤズド州	0	16	2.9	0		0		0		1
手織りゲリーム・ジールー	全国	0	40		22		54		57		85
	ヤズド州	0	9	22.5	10	45.5	8	14.8	6	10.5	2

（出所）表1に同じ。

顕著な集中によって特徴づけられる。表4は，ヤズド州の九つの工業部門の固定資本額，生産額，付加価値生産額，就業者数を示したものであるが，ここからは顕著な特徴を読みとることができる。つまり，1997年時点のヤズド州全体の工業部門に占める織物・衣料品工業部門の比率は，生産額，付加価値生産額，固定資本額，就業者数のいずれの面をとっても他を圧している。

例えば，装置産業である化学産業は，固定資本額は300億リヤール（1ドル＝3000リヤール）と巨額であるが，就業者数は4000人に満たず，雇用源としては織物・衣料品部門の比ではない。また，就業者数が，織物・衣料品部門に次ぐ，鉱業（金属を除く）は7400人余りを雇用するが，付加価値生産額は500億リヤール強にすぎず，1人当たりの付加価値生産額は繊維部門に遠く及ばない。

このようにあたりまえではあるが，ヤズド州の繊維産業にも，少ない固定資産で，相対的に多くの付加価値を生み出す，労働集約工業の特徴が現われている。

本節をまとめておけば，(1)イラン全体に占めるヤズド州のシェアを単純に

工場数（1995年）

%	20～49名	%	50～99名	%	100～499名	%	500～999名	%	1,000名以上	%	計	%
	184		70		98		28		30		5,847	
10.3	21	11.4	8	11.4	12	12.2	3	10.7	1	3.3	435	7.4
	35		10		2		0		0		1,783	
	1	2.9	0		0		0		0		56	3.1
	31		13		13		0		0		11,391	
7.9	3	9.7	0		2	15.4	0		0		366	3.2
	95		13		11		2		1		18,018	
0.2	1	1.1	1	7.7	1	9.1	0		0		128	0.7
	3		3		2		0		0		723	
8.3	0		0		1	50	0		0		18	2.5
	83		22		15		2		4		384	
2.4	6	7.2	4	18.2	1	6.7	0		0		46	12

表4　ヤズド州の各工業部門の生産額，付加価値生産額，その他（1997年）

（単位：10億リヤール）

	固定資本額	%	生産額	%	付加価値生産額	%	就業者数	%
食品・薬品	26.6	2.3	233	5.83	40.0	4.0	1,760	4.0
織物・衣料	441.0	37.8	2,122	53.1	657.0	64.9	24,217	55.6
化学・セルローズ	368.4	31.6	309	7.7	59.5	5.9	3,726	8.6
鉱業	138.6	11.9	180	4.5	57.5	5.7	7,463	17.1
金属	34.8	3.0	493	12.3	95.0	9.4	1,958	4.5
電気・電子	38.5	3.3	210	5.3	19.2	1.9	1,909	4.4
自動車	11.6	1.0	25	0.6	5.5	0.5	391	0.9
機械製造・装備品	29.3	2.5	143	3.6	42.3	4.2	1,425	3.3
鋳造・圧延	77.9	6.7	284	7.1	36.5	3.6	728	1.7
合計	1,166.7	100.0	3,999	100.0	1,012.5	100.0	43,577	100.0

（出所）表2に同じ，p. 4.

みれば，人口，農業，工業生産などの各側面のいずれも低い。(2)また，かつては工業部門が，従事者数ベースでは全産業部門中最大であったが，今ではイラン全体の傾向と等しくサービス業が最大の部門を構成するようになった。(3)人口増加率もイラン全国と同様に非常に高率である。ただし繊維工業に限定すれば，(1)繊維工業の全国に占めるシェアはかなりの高さを誇っている。(2)そして最後に，ヤズド州内部でも繊維工業のシェアは他の工業部門を圧倒して高い。このような点がヤズド地域の個性といえよう。

第3節　ヤズド州内の繊維産業の構造
——工場規模の側面を中心に——

最初に述べたように工場規模とその立地が本章での視角になる。そこでまず本章ではヤズド州の繊維工業内部の構造変化をふまえた上で，工場規模の点から検討を進めることにする。

1．繊維産業の構造変化

(1)　革命以前の状況（1930年代～70年代）

ヤズドの織物生産は，『東方見聞録』においても絹織物産業が盛んであったという地誌的記述がなされているように，きわめて古い歴史を有している。とはいえ，近代工場制工業の歴史は，1930年代初めにイクバル紡績工場とデラフシャーネ・ヤズド工場が設立されたのを嚆矢とするから，ここ60年ほどのことにすぎない（Edāre-ye Koll-e Sanāye‘-e Ostān-e Yazd, 1995: 1)。

前章で触れたように，手機という生産手段の根強さは，イラン織物産業の特徴の一つであるが，これはヤズド地域には特に当てはまる傾向といえよう。1960年頃には，ヤズド地域のシェアは，手機織機に関していえば，国内第2位（1万7000台：全国シェア28.1%），さらに操業休止中の台数を含めれば他地域を制して圧倒的に全国一であった（Sherkat, 1963: 42-43)。

もちろんこの時期，力織機の使用も拡大しつつあった。ただ，当時ヤズド地域の工場制機械紡織工業は，紡績工場の紡錘数こそ，エスファハーン，テヘラン，マーザンダラーンに次いで全国第4位(紡錘数4万406：全国シェア6.4%）の地位にあったが，織機数については，第7位（405台：2.8%）にすぎず，工場数自体も少なかった（Sherkat, 1963: 37-40)。つまり，この時点では，ヤズドにおいても，工場制機械工業としては，織物部門よりも，紡績部門のほうが相対的に進展が進んでおり，跛行的な性格がうかがえる。

なお，1970年代初頭になってもイランの主力大型紡績・織物工場の生産能力に占めるヤズド州のシェアは，綿・化合繊織物4%，綿紡績10%と，以前からの紡績部門の優位に変化はない（Sādeqī, 1977: 18)。

1970年代とはイラン全土で工業化が進展した時期であり，それに漏れずヤズド州でも繊維・織物部門のみならず，金属加工，金属精錬，化学などの多額の固定資本が必要な工場が設立された。しかしながら，ヤズドについては，外部からの大型投資は政府・民間のいずれからも恵まれず，地元資本によっ

て担わざるをえなかったことに注意する必要がある（Sāzmān-e Barnāme va Būdje-ye Ostān-e Yazd, 1998: 274)。

(2) 革命後の状況（1980年代以降）

こうした工場設立の結果，パフラヴィー朝末からヤズド州においては織物部門が生産能力を急拡大することになり，絶対的にも相対的にも主力部門となる。そして，この傾向は，現在に至るまで引き継がれることになるが，その点に関しては次節以降に工場の規模および政策とのかかわりで論じることにする。革命後の数値を示しておけば，イランの織物生産高に占めるヤズド州の比率は，1982/83年の11.1%から84/85年には15.7%に上昇している。両年ともにテヘラン，エスファハーン州に続く第3位に位置し順位に変動はないのだが，上位2州が比率を落とすなか(33.0→30.5%，27.9→24.2%)で，ヤズド州は順調にシェアを伸ばしたことになる（Qarebāghiyān, 1994: 36)。

地理的にみて，1987/88年時点で，イラン全土で大型綿織物工場(織機数300超）を擁するのは，エスファハーンが最大（5工場）であった。カーシャーン(4)，テヘラン(4)に次いで，ヤズドには3工場が所在してガーイムシャフル(マーザンダラーン州）と並び第4位であった（ただし，ヤズドは計画中を加えると4)。また規模的にも，ヤズド州には，テヘランやエスファハーンに所在する工場に匹敵ないし凌駕するイラン最大級の工場が立地していた。ただ，質的な側面についていえば，ヤズド州の工場にはより先進的な設備であるシャットルレス織機は装備されていなかった（Qarebāghiyān, 1994: 30-34)[13]。

他地域との違いとしては，経営形態の差も指摘することができる。この時点（1366：1987/88）の綿織物・化合繊織物関係の主力工場はイラン全土で54を数えるが，そのうち，純然たる私企業であるのは，20にすぎない。しかも，ヤズド所在の工場が六つを占めており，このシェアは特筆されよう。

というのも，革命後は民間工場の国有化や公的な被抑圧者・献身者財団(MJF)との合同が増えたために，純然たる私企業は激減したとされるからである[14]。ヤズドに所在する10工場の内訳は，先に述べたように私企業が6工

場であり，残りは，MJFと私企業の合同によるものが1工場，MJFが経営・所有する工場が2工場，そして未定（計画中）が1工場であり，私企業の割合が断然高い。他地域では，政府や他の省庁によって所有・経営される工場が多いのだが[15]，ヤズドにあってはそうした経営形態の工場は綿織物・化合繊織物部門に限っては皆無である。これは先に触れた1970年代の投資が主として地元資本によって行われた結果であるといえる。

(3) 現　在

現在のヤズド州下に所在する生産能力がイラン全体に対してどれほどのシェアをもっているかについては統計の整合性から推測が難しいが，参考までに表5を掲げておく。先にも述べたようにこの数値自体は，あくまで公称生

表5　全国とヤズド州の主要製品の生産能力

製　品		単　位	生産量 A	参考（ヤズド州） B	(B/A) ×100(%)
紡績（綿・化合繊維）	糸　類	トン	240,000	14,045	5.9
織布（綿・化合繊維）	布　類	100万m²	1,070	279.6	26.1
サ　ー　ジ	サージ用の糸	トン	12,000		
	サージ	100万m²	52	12.9	24.8
靴　下	靴下類	1,000ダース	4,500	240.7	5.3
毛　布		100万枚	35	4.4	12.6
モケット織り	タフティッド・モケット	100万m²	200	1.5	0.8
機械織り絨毯	機械織り絨毯用の糸	1,000トン	102	4.7	4.6
	機械織り絨毯	100万m²	63	5.2	8.3
メリヤス織り		1,000トン	45	2.4	5.3

（出所）Harātī, 1997-98, pp. 139-140および，ヤズド分は表6より作成。

表6　ヤズド州の繊維工業部門の生産能力（1997年）

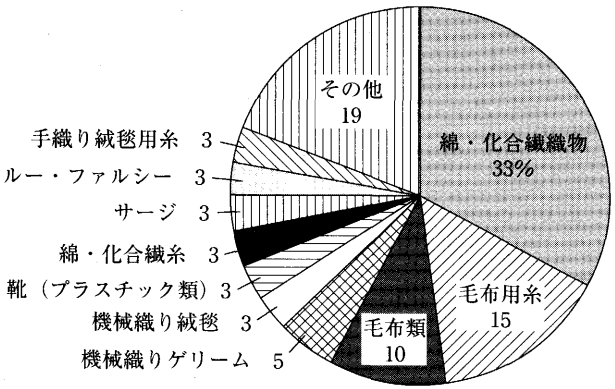
製　品	1997		単　位
	工場数	生産能力	
綿・化合繊織物	128	279,562,500	m²
毛　布　類	56	4,379,550	枚
毛布用の糸	36	19,100	トン
ゲ リ ー ム	17	586,500	枚
機械織り絨毯	13	5,215,000	m²
プラスチック製の靴	13	461,000	組
綿・化合繊維糸	11	14,045	トン
サ ー ジ	10	12,865,000	m²
ルー・ファルシー	10	180,000	枚
手織り絨毯用の糸	10	2,350	トン
機械織り絨毯用の糸	8	4,650	トン
靴　下	7	2,888,800	組
メ リ ヤ ス	6	2,350	トン
運　動　着	6	203,000	組
カ シ ミ ヤ	4	71,750	m²
綿布の染織・仕上げ加工	3	40,200,000	m²
ハイバルキー糸	3	1,600	トン
モ ケ ッ ト	3	1,570,000	トン
パンベ・パーコニー	3	4,500	トン
幼児・子供服	3	55,000	組
そ　の　他	27		

（出所）表2に同じ，pp. 38-39より作成。

産能力なので稼働率いかんによってはヤズドのシェアが過大になってしまう可能性がある。確かに，先に示した工場数（表2）や，1987/88年の数値と比較すると，多少過大であるように思われるふしもあるが，おおよその傾向は理解されよう。すなわち，綿・化合繊織物（26.1%）を筆頭に，サージ（24.7%），毛布（12.5%），機械織り絨毯（8.3%）あたりが目立つなか，綿紡績などの原糸部門の比率は低調である。

全国レベルおよび州レベルで織物部門に特化していったヤズド州の姿は明確であるが，繊維産業内部の構造はいかなるものであろうか。表6と図1は，ヤズド州の織物・衣料品工業の主要生産物ごとの工場数と，生産能力を掲げ

図1　ヤズド州の繊維工業部門の工場数（1997年）



（出所）表6に同じ。

たものである。この図表から明らかなように，この分野の工場の3分の1が「綿・化合繊織物」というカテゴリーに含まれている。それに次ぐのが，「毛布（織り）」であり，さらに「毛布用糸（の紡績）」，「機械織りゲリーム」，「機械織り絨毯」などが続く。一方で，生産量の多い「サージ」の工場数は10単位を数えるにすぎず，同様に「モケット」も3単位にとどまっている。

工場規模に関しては次節以降の検討に譲るが，工場数と生産能力を考え合わせれば，パフラヴィー朝末までは紡績部門が機械化をリードしていたヤズド州の繊維・織物部門の構造は，現時点では，織物部門への特化が高まったことがわかる。なかでもやはり，生産能力，従業者数，工場数の各面からみて，綿・化合繊維織物部門が抜きん出た重要性を有している。一方，相対的にみて「川上」の紡績部門や「川下」の衣服縫製部門は弱い。

2．工場の規模

本節では，工場の規模の面から，現在のヤズド州繊維工業部門の構造を検討する。手順としては，まず利用するデータの性格を把握した上で，生産能力に占める大規模工場のシェアの卓越性を指摘することにする。

(1) 『ヤズド州工業要覧』

工業省傘下のヤズド州工業総局[16]は，工業総局が監督官庁[17]となるヤズド州所在の各工業部門の「工場」（正確には，「生産単位」）[18]をリストアップし，それぞれの生産能力，従業者数，履歴，住所，電話番号その他の情報を掲載した『ヤズド州工業要覧（*Sīmā-ye San'at-e Ostān-e Yazd*）』というタイトルの報告書を不定期（近年は定期的に年1回）発行している。この報告書は，年度によって，掲載される情報の種類や単位にばらつき[19]があるために，データの性格が異なり，一貫したデータとして扱い辛い部分も大きいが，代わりうる数値がないためにここではこの統計の織物・衣料品部門の項目を利用することにする。

ただ，この資料の数値を利用する上でのバイアスは理解しておくにしくはない。すなわち，この数値はあくまで公称生産能力の統計であるため，実際のパフォーマンスを過大に評価してしまう可能性があること，また生産物の分類も大雑把であるため，生産物の単価や品質，その他の詳細は不明であること，などである。またイランの統計では統計によって数値が食い違うことが稀ではなく，信憑性に疑問が残る部分もあるが，これもできるだけ整合するように努めたい。

(2) 生産能力に占める大規模工場のシェア

ところで，ヤズド州において設立・操業許可証を所有しなおかつ活動中の

表7　ヤズド工業総局監督下の工場（繊維工業部門）

	工場数	従業者数	平均従業者数
1985	145	14,407	99.4
1992	247	19,329	78.3
1995	333	記載なし	—
1997	343	20,833	60.7

（出所）表2に同じ，各号より集計。

織物・衣料品工業関連の工場は，1985年段階では145単位であった（表7）。これが，92年には247単位（1.7倍）になり，1373年末（95年）では1363年の2.3倍に，そして97年には同じく2.4倍となった。一方，85年の従業者数は1万4000人余りであったが，92年には1.3倍の1万9000人に増加した。それ以降，伸びは鈍化し，97年では2万人余りと微増にとどまる。よって，単純平均すれば，1単位当たりの従業者数は，85年末99.4人から97年の60.7人へと大きく減少したことになる。起業自体は活発とみるべきであろうが，工場の平均規模は大きく縮小している[20]。

しかしながら，工場規模に関しては注意すべきポイントが二つある。一つは，零細生産者の集合体である生産組合を一つの工場（生産単位）として計算しているという点であり，第2点は，大規模工場を含んでいるために先の数値は嵩上げされている可能性があるということである。つまり，この2点から実際の平均値がさらに縮小するという潜在性を孕んでいるのである。もちろん，従業者数のみならず，生産能力の平均規模からも考慮する必要がある。

そこで，さらに詳しく各工場の規模の問題を検討するために，従業者数100人以上の工場のみを抜き出したものを表8に掲げた。先に掲げたヤズド州の各生産物の合計値（表6）は，設立許可証を所有する工場の数とその生産能力であるため，『ヤズド州工業要覧』に個別に掲載された現在活動中の工場の生産能力を単純に合計しても，表6の工場数および生産能力の合計には達しないが（後者は，設立・操業許可証の二つを所有している数なので），生産能力の単位および製品のカテゴリーの整合性[21]を厳密につける術がこの資料のほかにはないために以下の推測はそれを考慮して読んでいただきたい。

主力製品ごとに上位工場を検討すると次のようになる。まず，

(1)1997年度のヤズド州下の綿・化合繊織物製造に従事する工場は合計128単位，生産能力は2億7956万平方メートル余りであったが，これに個別の工場の数値（表8）を当てはめると次のようになる。すなわち，3200名の組合メンバーを擁する⑫シャルキャテ・ターボニーイェ・サナーイェイェ・バーファンデガーネ・ヤズド（生産組合）が，総生産能力の25.8％を，次いで，㉖ヤズ

表8　1997年時点で従業者数が100名を超える工場

	名　称	年　度	生産物	生産能力	単位	従業者数	創　業
民間	① シェルキャテ・アフシャーレ・ヤズド	1359				512	
		1363	サージ 毛布	1,200,000 180,000	m² 枚	586	
		1370/75	サージ 毛布	1,800,000 180,000	m² 枚	600	1340/10/ 8
MJF	② シェルキャテ・リーサンデギー・オ・バーファンデギー・イェ・ジョヌーベ・ヤズド	1359				506	
		1363	綿糸および綿・化合繊織物	4,500,000	m	610	
		1370/75	綿・化合繊織物 綿・化合繊糸	3,500,000 700	m² トン	660	1342/11/19
国営	③ シェルキャテ・ギャルドバーフェ・ヤズド	1359				217	
		1363	メリヤス	5,000,000	m	260	
		1370/75	織物の仕上げとメリヤス 布の仕上げおよび織布	1,650 1,330	トン トン	273	1355/ 7 /14
民間	④ シェルキャテ・ターバーネ・ヤズド	1359				264	
		1363	綿毛布	200,000	枚	280	
		1370	毛布	200,000	枚	270	
		1375	毛布 毛布用の紡績	480,000 1,800	枚 トン	270	1356/ 1 /19
民間	⑤ シェルキャテ・フォルーレ・モケット	1359				50	
		1363	モケット	2,000,000	m²	65	
		1370/75	モケット	2,000,000	m²	100	1356/ 2 /19
MJF	⑥ シェルキャテ・シェルクバーフ	1359				126	
		1363	合成繊維製の布地	15,000,000	m	508	
		1370	綿・化合繊織物 綿・化合繊糸	11,600,000 1,500	m² トン	971	

		1375	綿・化合繊織物 綿・化合繊糸	12,300,000 2,100	m² トン	829	1957/ 2 / 9 *
民間	⑦ シェルキャテ・ヤズド・バーフ	1359				1,668	
		1363	綿糸および綿・化合繊織物	45,000,000	m	1,714	
		1370/75	綿・化合繊織物 綿布の仕上げおよび染色 綿・化合繊糸	25,000,000 25,000,000 3,800	m² m² トン	1,780	1357/ 7 /10
民間	⑧ シェルキャテ・サアダアテ・ナサージャーン	1359				772	
		1363	綿糸および綿・化合繊織物	11,000,000	m	830	
		1370/75	綿・化合繊織物	11,000,000	m²	810	1357/ 7 /10
民間	⑨ シェルキャテ・ファルシェ・バースターン	1359				50	
		1363	機械織り絨毯	120,000	m²	80	
		1370/75	機械織り絨毯	700,000	m²	526	1359/12/ 3
民間	⑩ シェルキャテ・バキーレ・ヤズド	1359				98	
		1363	毛布	200,000	枚	114	
		1370/75	毛布	200,000	枚	110	1360/11/11
民間	⑪ シェルキャテ・リーサデギー・イェ・サイード・モハンマド・ア・ガー	1359				199	
		1363	綿・化合繊糸	1,200	トン	174	
		1370/75	綿・化合繊糸	1,200	トン	230	1361/ 2 /29
生産組合	⑫ シェルキャテ・ターボニー・イェ・サナーイェエ・バーファンデガーネ・ヤズド	1363	合成繊維の織物	72,000,000	m	3,200	
		1370/75	綿・化合繊織物	72,000,000	m²	3,200	1361/ 4 /24
生産組合	⑬ シェルキャテ・ターボニー・イェ・ジールーバーフィー・イェ・メイボド	1363	ジールー	400	トン		
		1370/75	ジールー 綿・化合繊織物	400 7,500,000	トン m²	400	1361/ 6 /14
生産組合	⑭ シェルキャテ・ターボニー・イェ・ナグシェ・バーファーネ・ザールチ	1363/70 /75	綿・化合繊織物	5,000,000	m²	420	1361/11/16
民間	⑮ シェルキャテ・リーサデギー・イェ・リーシュカール	1363	綿・化合繊糸	800	トン	134	
		1370/75	綿・化合繊糸	1,000	トン	134	1362/ 4 /20

	名　称	年　度	生産物	生産能力	単位	従業者数	創　業
民間	⑯ デラフシャーネ・ヤズド	1359				555	
		1363	糸	375	トン	541	
			羊毛織物	500,000	m		
			毛布	150,000	枚		
		1370	サージ	870,000	m²	520	
			毛布	260,000	枚		
			綿・化合繊糸	380	トン		
			毛布用の糸の紡績	680	トン		
			毛布および繊維の糸	650	トン		
		1375	サージ	870,000	m²	520	1362/ 7 /21
			毛布	260,000	枚		
			綿・化合繊糸	750	トン		
			毛布用の糸の紡績	680	トン		
			羊毛糸の染色	650	トン		
民間	⑰ ザリーネ・ヤズド	1359				149	
		1363	毛布	200,000	枚	162	
			毛布（パールチェ）	400,000	m		
		1370	毛布	200,000	枚	162	
			綿・化合繊織物	600,000	m²		
		1375	毛布	350,000	枚	162	1364/ 3 /13
			毛布用の糸の紡績	1,400	トン		
民間	⑱ シェルキャテ・ファルシェ・シェターレ・イェ・キャビール	1363	機械織り絨毯	445,000	m²	179	
		1370/75	機械織り絨毯	1,500,000	m²	302	1369/ 3 /13
生産組合	⑲ ターボニー・イェ・ダストバーファーネ・ヤズド	1370/75	綿・化合繊織物	700,000	m	650	1366/ 5 / 5
民間	⑳ ヤズド・ターブ	1370/75	綿・化合繊糸	1,100	トン	117	1367/ 6 / 5
民間	㉑ シェルキャテ・バーフテハー・イェ・ナスウゼ・パールス	1370/75	不燃性ロープ	150	トン	96	1367/12/25

MJF	㉒ シェルキャテ・バーファンデギーイェ・マーフバーフ	1370/75	サージ	3,730,000	m²	115	1368/ 9 /19
民間	㉓ シャーディー・バーフ	1370/75	毛布 機械織りゲリーム	133,000 27,000	枚 枚	130	1369/ 6 /11
民間	㉔ シェルキャテ・リーシャンデギーイェ・パシメ・ガルブ	1370/75	綿・化合繊糸	1,200	トン	100	1370/11/17
民間	㉕ シェルキャテ・トウリーディー・ネガーリーン・バーフェ・キャビール	1370/75	上着とズボン マントとズボン 運動着 ブラウス類 下着および寝間着	220,000 220,000 40,000 185,000 185,000	組 組 組 組 組	135	1370/10/25
民間	㉖ ヤズド・バーフ	1370	綿・化合繊織物	60,000,000	m	1672	
		1375	綿・化合繊糸 綿・化合繊織物	5,700 50,000,000	トン m²	570	1375/ 9 / 3
民間	㉗ シャード・リーシュ	1375	綿・化合繊糸	1,650	トン	140	1372/ 4 / 8
民間	㉘ サナーテェ・パシメ・ヤズド	1375	機械織り絨毯	600,000	m²	130	1373/ 5 /11
民間	㉘ シェルキャテ・ファルシェ・カシュリー	1375	機械織り絨毯	650,000	m²	130	1373/ 5 /24
民間	㉙ シャルキャテ・トウリーディーイェ・モウヘレ・ナヘェ・ヤズド	1375	ポリエステル糸 メリヤス糸 毛布用の糸の紡績	1,100 1,125 1,450	トン トン トン	240	1373/ 6 /10
民間	㉚ シェルキャテ・ファルシェ・ヤズド	1375	機械織り絨毯	600,000	m²	140	1373/ 9 /23
民間	㉛ シェルキャテ・ナサージーイェ・ヤズド	1375	アクリル糸	2,200	トン	200	1374/ 6 / 2
民間	㉜ シェルキャテ・ペザシュキーイェ・ヘイリーイェ・ハズラッテ・サイード・アルシャハダー	1375	綿・化合繊糸 綿・化合繊織物 綿・化合繊織物の染色・捺染・仕上げ	2,900 19,000,000 16,400,000	トン m² m²	500	1375/12/27

(注)なお，⑥の「シャルキャテ・シェルクバーフ」の創業年次は，1374年度の『ヤズド州工業要覧』の記載。1376年度版では，1375/6/22に改められている。また，「年度」の項に関して変化のないものは，例えば1370年と1375年が同じであれば，「1370/75」と表記した。

(出所)表2に同じ，各号より作成。なお，1359年の従業者数については，Sāzmān-e Barnāme va Būdje, *Daftar-e Barnāme va Būdje-ye Ostān-e Yazd*, Vol. 1, 1976, pp. 155-159より作成。

ド・バーフが17.9%，⑦シェルキャテェ・ヤズド・バーフが8.9%を占める計算になる。協同組合を別にしてもこの上位2工場で，総生産能力の4分の1を上回る。

(2)サージ工場は10を数えるが，総生産能力1200万平方メートル余りのうち，最大の①シェルキャテェ・アフシャーレ・ヤズドが，14%の生産能力をもっている。

(3)毛布類は，工場数が56と綿・化合繊織物に次いで多い。最大の工場④が48万枚と10%余りの生産能力を有しているものの，10万～20万枚クラスの工場も比較的多い。

(4)機械織り絨毯は，工場数13を数えるが，最大の工場⑱が生産能力の29%を，第2の工場⑨が13%を占めている。

以上明らかなように，主力産品のそれぞれについて，最大の工場が総生産能力の15～30%を構成していることになる。このため，従業者数ではなく，生産能力の点からこうした主力工場を除して残りの工場の平均規模を求めると，先に掲げた従業者数の単純平均値(表7)よりもずっと変動が大きくなる。さらに，綿・化合繊織物の場合には，㉖ヤズド・バーフと⑦シャルキャテ・ヤズド・バーフは同一企業の経営下にあるために，これを一つと数えれば，この部門の平均値はさらに小さくなる（1工場当たりの平均生産能力：210万平方メートル→160万平方メートル）ことに注意しなければならない。すなわち，最初に述べたイラン全体の傾向同様，ヤズド州においてもやはり中小規模の工場が未発達であることがわかる。

製品と規模に基づいて工場を区分しておけば，おおよそ次のようになる。

(1)少数の大規模工場と，比較的多数の小規模零細工場の共存

綿・化合繊織物，毛布類，機械織り絨毯。

(2)少数の大規模工場による生産

サージ，綿紡績・化合繊糸。

(3)小規模な工場による生産

機械織りゲリーム，靴下，毛布用の糸。

それ以外は工場数が少ない。

なお，従業者数が100人を超えるような大型の工場（生産組合を除く）は，やはり主力の綿・化合繊織物部門が六つと最多である。以下，綿紡績・化合繊糸(5)，毛布(6)，機械織り絨毯(5)，サージ(3)，モケット(1)，衣服縫製(1)，織物の仕上げ・加工(1)などとなっている。さらにこのなかで，500人以上の従業者をかかえる最大級の工場は，綿・化合繊織物(6)，サージ(2)，機械織り絨毯(1)である（複数の製品を生産する工場に関しては主力製品で計算した）。また，地理的な分布については，次章で改めて触れることになろうが，ヤズド県に8単位，アルダカーン県に1単位の合計8単位が現在操業を行っている。

以上，工場規模の検討から明らかになったことは，ヤズド州の繊維・織物工業はきわめて卓越的な生産能力を有する少数の大型のプラントと，比較的数は多い零細な工場群から構成されていることになり，二極化の様相を示すということである。これは，各主力製品に共通する傾向であるが，特に工場数の卓越的な綿・化合繊織物部門で顕著であった。

次いでこうした大型工場の動向を創業年次の側面から検討することにしよう。

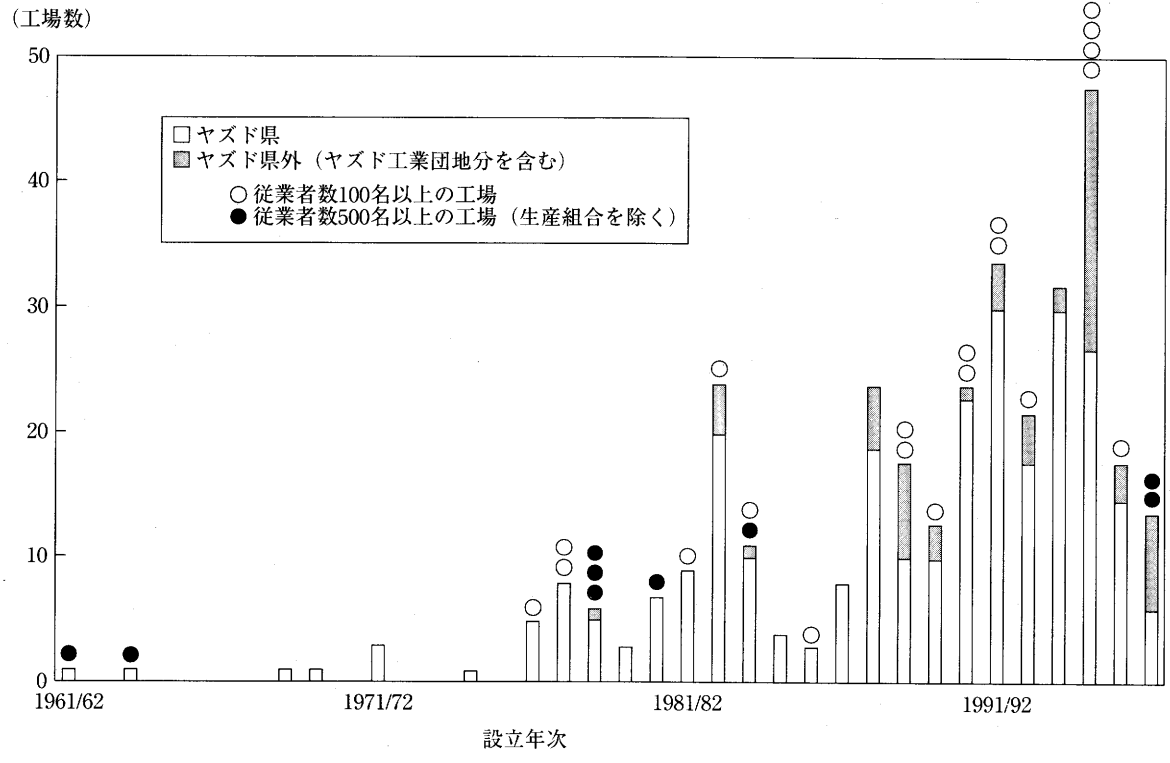
第4節　工場の創業年次

1．工場の創業年次

1996年末時点でヤズド州において操業している工場の創業年次を図示したものが，図2である。業態変更や拡張によって創業年次が改められた工場もあるために，この履歴から得られる情報は限定的である。また当然，工場の年次は近年になるほど増加する（古いほど廃業した企業や業態変更して創業年次が改まった企業が多いと考えられるため）。

とはいえ，創業年次にバラツキがあること，つまり1980年代初頭から半ば

図2　工場の創業年次（1997年時点）



（出所）*Sīmā-ye San'at-e Ostān-e Yazd*，各号より作成。

にかけて山と谷を経験していることが理解される。もちろん，革命時に工場設立が落ち込んだことは理解できるし，計画立案から実際の稼動・生産までのタイムラグがあることを考えれば，革命後しばらくして，革命以前の計画が完了した後に工場建設計画および工場新設が落ち込んだことは容易に説明がつく。

ヤズド州の生産能力の大半が各分野の最大規模の工場によって占められていることは先に明らかにしたが，この事実は見方を変えれば，ヤズド州の生産構造が大工場の稼働の前後で一変したことを意味する。さらに，工場設立後，その生産能力にほとんど変化がみられないならば，生産能力の変化はこうした大規模工場の設立時によりいっそう集中することになると想定される。よって，その設立時期の検討はそのままヤズド州の繊維工業の生産能力の変化の歴史を示すことにほかならない。

そこで先の表8に照らし合わせてみると，従業者数100人以上の工場でも近年になるほど増加するという一般的な傾向はほぼ変わらない。しかしながら，500人以上の従業者をかかえる最大規模の工場はこうした全般的な傾向とは多少異なる傾向を示す。すなわち，設立年次は，1961年，64年にそれぞれ1単位，また，78年に2単位，79年，81年，83年にそれぞれ1単位ずつ，96/97年に2単位となっている。ただし，拡張その他の理由で名称が変わった場合には，新しい創業年次が適用されるため，食い違いの可能性も排除できないが[22]，それでも興味深い点が明らかになる。つまり大型工場の創業年次は，(1)60年代初頭，(2)パフラヴィー朝末期，(3)最近年，に集中していることになる。

述べ得るのは，こうした最大規模の工場に関しては，まず，(1)重化学工業への投資が国家政策的に拡大する以前の，第2次7カ年計画（1956～62年）の末期と第3次5カ年計画（63～67年）の初期に建設された[23]。(2)次いで，パフラヴィー朝末に大型の工場建設計画・投資が行われた。そして，革命後しばらく織物・衣料品工業部門への工業投資が行われていなかったが，(3)最近になってやっと再開された，ということである。

同じくこの表8を見て驚かされるのは，1359～75年の間の変化の乏しさである。もちろん，統計の採り方にも問題はあろうが，生産品目，生産量，従業員数のいずれをとっても変化がみられる工場は少ない。イランの繊維・織物プラントは老朽化・陳腐化が進行しており，政府もそれを認識し，イランには近代化が必要な老朽化した60もの織物プラントがあるとイラン工業相も昨秋発言している（*Iran News*, October 13, 1998: 3）が，こうした状況はヤズド州の場合も例外ではない。

また，ヤズドの大型工場では，紡績，織布，および染色，仕上げ・加工といった複数のプロセスを兼営し，自社内ですべての工程を完了することができる工場が少なくない(表8を参照)。例えば，わが国と比較すれば，日本においては独占体制にある紡績・化合繊糸メーカーを頂点とし，中小零細な織物業・衣服縫製業が底辺部分を構成している。つまり，「川上」部門が「川下」部門を支配するピラミッド型の生産工場を形成する。日本でも紡績・化合繊糸メーカーが織物部門を兼営することは多いが，なおいっそう，ヤズドでは外注依存度が低く，内製化率が高い。内製化の高さはヤズド州において最も生産量が多くかつ工場数の多い，裾野の広いはずの綿・化合繊部門においても当てはまる。つまり，ヤズドの繊維部門においては，特定専門部門への特化も資本の系列化も進んでいないことを示している。これがイラン全体に敷衍できる特徴であるのかどうかの解明にはイラン全体との比較が必要であるが，この点は本章の議論を超える。

本節では，前章に引き続いて大型工場を中心に工場規模とその特徴を考察してきた。ヤズド州の織物工業は，寡占とはいえないまでも少数の大規模工場が総生産能力のかなりの部分を構成していることは前章で明らかにしたとおりだが，その大規模工場はパフラヴィー朝期に設立・計画されたものが中心であり，革命後20年を経た今日に至るまで生産能力その他にあまり変化がみられないのも事実である。巨大な生産設備が重荷となって変革が進まないということもあろうが，いまだヤズド州の織物工業の構造は前政権時代のそれに強く規定されているというのが現状のようである。それでは革命後，政

府や関係当局はこの繊維部門をどのようにとらえていたのか，あるいはどのような政策・関与を行ったのか。そして現在はどうなのだろうか。

2．工業発展に関するヤズド当局の期待

(1)　ヤズド州の工業計画：『ヤズド州経済・社会発展綜合研究』

1980年代中期に発行された『ヤズド州の経済・社会発展のための綜合研究(*Motāle'e-ye Jāme'-e Touse'e-ye Eqtesādī va Ejtemā'ī-ye Ostān-e Yazd*)』は計10巻から構成されるが，その第7巻は「工業」に関する巻に充てられており，2002/3年までの長期的な工業計画とその見通しが策定・説明されている。これは革命後に出されたヤズド州の本格的な綜合計画として検討に値するものといえよう。

この計画では，繊維・織物工業に加えて，工作機械工業と金属工業の発展に特別の配慮がなされたと主張されている（Gorūh-e Motāle'ātī-ye Hamūn, 1986: 263)。しかしながら，各期間のヤズド州の工場制機械化工業における投資計画をみると，製造業部門の固定資本投資額に占める織物・衣料品部門への配分計画額は，1984/85～87/88年期に40.2%，88/89～92/93年期が14.0%，93/94～97/98年期が36.3%，98/99～2002/3年期が34.2%（Gorūh-e Motāle'ātī-ye Hamūn, 1986: 291-298）に達するとされており，実際には織物・衣料品部門が主軸をなしている。

(2)　繊維・織物工業

主要な部門[24]の計画を確認しておけば，

—綿・化合繊織物とサージ部門ではそれぞれ，シャットルレス織機の大量導入の必要性が述べられている。

—毛布生産に関しては，今回の計画では工場の新設の必要性はないとしている。

—モケットおよび機械織り絨毯[25]の生産は，1987/88年までは順調に成長

すると見積もったため，特別な方針は立てられていない。一方，87/88年以降にはさまざまな計画が立てられるが，このことは後述する。

ボトルネックと判断されたのは，紡績部門と染色部門の二つであるが，

—紡績部門は，綿糸，羊毛糸のいずれも1983/84年の段階では，ヤズド州の織物生産能力を満たすレベルに達していなかった。計画では一時的に供給能力が州の需要を上回る時期も予想されたが，再び98/99～2002/3年期には織布能力を下回るとされた。

以上が主要な部門の計画のあらましであるが，実際の進捗はあまりはかばかしいとはいえない。ただし，部門ごとの成長の差も大きい。1983/84年時点の生産能力と表6の生産能力を比較すると，綿・化合繊織物（2倍増），機械織り絨毯（22倍増），綿・化合繊糸（23%減），機械織り絨毯の原料糸（5.6倍），手織り絨毯の原料糸（2.3倍）などとなっており，なかでも機械織り絨毯の生産能力の成長が著しい。そこで次にこの機械織り絨毯部門の計画と実績を中心に当局の見通しとその食い違いを検討しよう。

(3) 実　績

機械織り絨毯生産は大幅に増加したが，『綜合研究』の時点では二つの大工場の動向が特別に重要視されていた。計画を詳述すれば表9のようになる。

第3次期（1993/94～97/98年）に名前が挙がったのが，ファルシェ・バースターン社とファルシェ・シェターレイェ・キャビール社である。表8から85年と92年の両社の数値を比較すると，機械織り絨毯の生産量はバースターン社が12万平方メートルから70万平方メートルに，シェターレイェ・キャビール社が44万5000平方メートルから150万平方メートルへとともに大幅拡大している。同様に，従業者数も大きく増加している。なお，97年の数値は92年と変わらない。このように，当初の計画とは異なり，両社の拡張計画は前倒しされたようである[26]。

工業省の下部組織が発行した繊維・皮革関連の工場設立計画の実績報告（1368～75年）によれば，シェターレイェ・キャビール社には，440万ドルの割

表9　機械織り絨毯とモケットの生産拡大の見通し

期　間	見　通　し
1984/85～87/88	—
1988/89～92/93	機械織り絨毯に22万4,000m²，モケットに672万m²を生産能力に新規に追加
1993/94～97/98	(a)ファルシェ・シェターレイェ・キャビールと，(b)ファルシェ・バースターンの2工場の工場拡張計画 固定資産投資計画額：(a)1億2,000万リヤール (b)1億7,935万リヤール 生産能力の新規追加：(a)機械織り絨毯16万8,000m² (b)機械織り絨毯60万5,000m²，モケット44万6,000m²
1989/99～2002/3	機械織り絨毯の生産能力の増加計画はなし モケットは，140万6,000m²の新規生産能力を追加
期　末	計画達成によって，ヤズド州下の生産能力は，国内の機械織り絨毯とモケットの総生産能力の3.5%に達する

(出所)Gorūh-e Motāle'ātī-ye Hamūn, 1986より作成。

当額がなされている（Harātī, 1997: 8)。ヤズド州の繊維部門は革命後も民間主導であると先に明らかにしておいたが，有望な部門に関しては，投資も行われるし，外貨の割当てもなされるようである。

また現在，ヤズド州下では，紡績・化合繊糸部門で，四つの大型工場の設立計画が進行中であり，こうした工場の完成のあかつきには，8900トンの原料糸の生産能力が新たに追加される予定である（Edāre-ye Koll-e Sanāye'-e Ostān-e Yazd et al., 1997: 20-21)。現在，繊維工業部門のなかで，進行中の大型工場建設はこれらをおいてないから，このボトルネックと認識されていた部門の拡大が重視されていることは明らかである。ただ，他の産業（機械，石油化学，化学工業）との密接な連係の構築は，政策提言のなかで繰り返しその必要が訴えられているようにいまだ緒についていない(27)。

本章では大規模工場の動向と州の関連当局の計画を中心に議論を進めてきたが，最初に言及したように小規模工業の動向にも着目する必要がある。ところで先の見通しでは，毛布生産工場の新設の必要はないとされていた。し

かしながら実は，近年の工場建設の大半を毛布生産部門が占めていることには注意しておく必要がある。図2のなかで，特に1994/95年が設立年次となっているヤズド県内の工場27のうち，実に16工場までが毛布製造である(ヤズド県外では4工場)。この年度の毛布工場は，従業員数は最大でも30名，平均すると12.3名という規模である。つまり，当局の思惑が外れ，小規模な事業者によるこの部門への活発な市場参入が続いているといえるだろう。

そこで次節では，大規模工場よりもむしろ小規模工場を重視しながら，立地の側面から検討を行うことにする。

第5節　ヤズド州内の繊維・織物工業の立地構造

ここまで工場規模の側面を中心にヤズド州の繊維・織物部門の産業構造とその特徴を指摘した。次いで本章では，ヤズド州の繊維産業の空間的な立地を検討する。なお，ヤズド州は，現在七つのシャフレスターン(県)――ヤズド，アルダカーン，メイボド，メフリズ，タフト，バフグ，アブルクーフ――から構成されている[28]。さらにヤズド州当局が工業団地(工業都市)の設立に強い関心を示していることは，報告書(注(25)を見よ)からも明らかであるので，県の区分に加えて工業団地（工業都市）も考慮することにする。

1．工場の地理的分布

(1)　ヤズド県

図3は，1995年の『鉱工業センサス』を基に，紡績・織布部門の工場の分布を，デヘスターン（郷）ごとに都市部と農村部に区分したものである。

まず都市部についてその特徴を検討すると，やはりヤズド市への集中(529工場）は傑出しており，そのシェアは繊維・織物部門（手織り絨毯，ゲリーム，ジールー，ジャジームを除く)の工場全体の55.8%までを占めている。残りの工

場もヤズド市の北西部の諸都市に多くが所在している。また，ヤズド州最西部のアブルクーフ市や南東部のメフリズ市にもまとまった数の工場がみられるが，これはいずれも従業員3名以下の零細工場である。

このうち，従業者規模10人以上の工場についていえば，ヤズド市（55.9%）とその近傍のシャーフディエ（11.8%）の2地区で7割近くに達する。

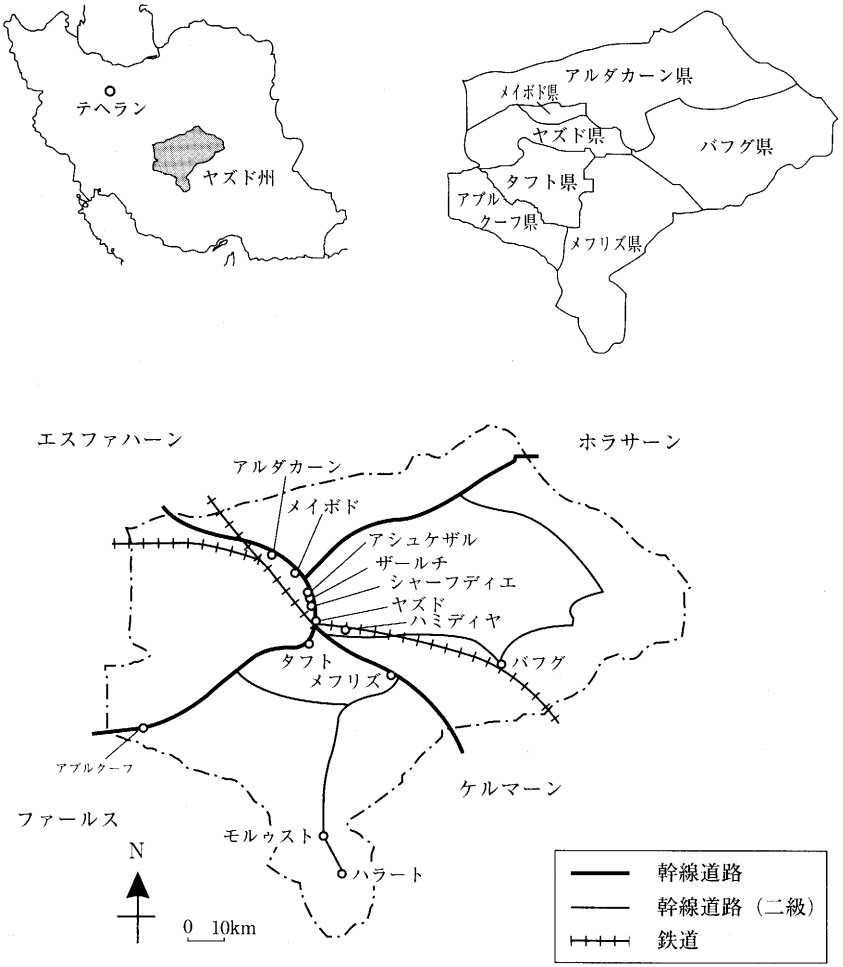
農村部についていえば，ヤズド県，メイボド県，タフト県の数値が高いものの，従業者規模10人以上の工場はヤズド県外にはほとんどみられない。なお，従業者規模10人以上の工場はヤズド県の農村部が州の総数の19.4%を占める。これをヤズド県の都市部と合計すれば，93.5%に達する。零細工場を含めた場合は78.0%にすぎないから，ヤズド県外に所在する工場の規模がいかに零細であるのかがわかる。

同じく1995年の『鉱工業センサス』に基づく数値を製品別に検討してみよう。バラツキはあるものの，やはりヤズド市への集中は高い。「紡績・織物」工場の59.8%，「織物の仕上げ」の66.1%，「衣類・小物」の59.6%，「機械織り絨毯・モケット」の25.6%までがヤズド市に所在している（Markaz-e Āmār-e Īrān, 1995）。

しかしながら変化がみられないというわけではない。10年前，つまり1984/85年時点では州の織物・衣料品関連工場の94.5%までもがヤズド県に集中していた。従業者規模50人以上の工場に限っていえば，ヤズド県外には皆無であった。その上，ヤズド県内の織物・衣料品工業関連の工場立地もその90%以上がヤズド市に集中していた（Gorūh-e Motāle'ātī-ye Hamūn, 1986: 16-18）。この点で，少ないながらもヤズド市外にも工場が増加したことは進歩とみるべきであろう。

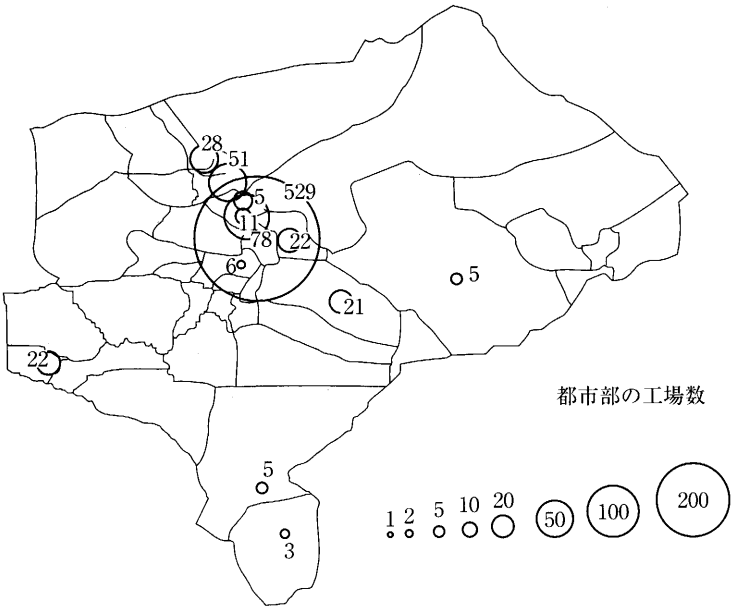
ヤズド市への工場の集中は手工業時代からの織物産業の集積に関連がある。しかしながら，この時点（1984/85年）でも騒音や工場廃水に起因する近隣住民への公害が問題となっており，集中は限界に達していた（Edāre-ye Koll-e Mohīt-e Zīst-e Ostān-e Yazd, 1984-85）。ただ，ヤズド市における工場数はいまだ増加しており，従来の大型工場も引き続き重要である。また，そ

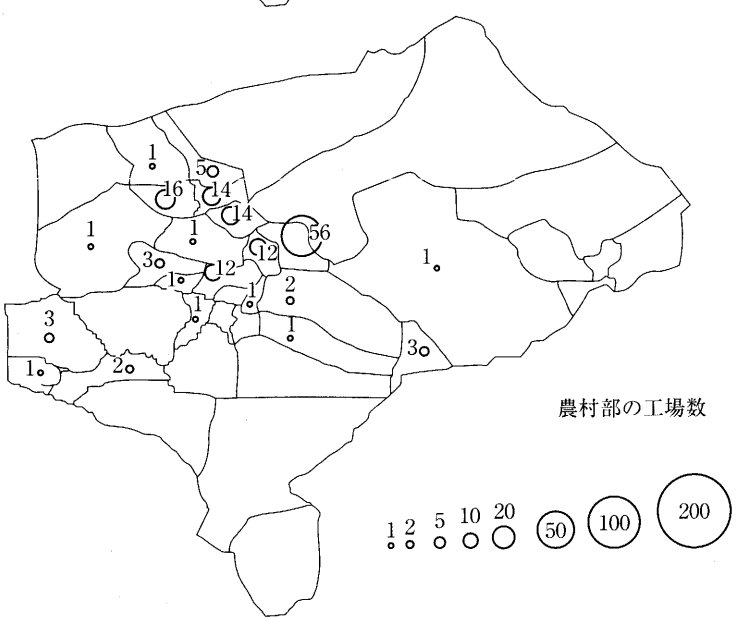
図3　繊維・織物工業



(出所) Markaz-e Āmār-e Īrān, 1995, 各号より作成。

部門の工場立地


28
51
529
5
11
78
22
6
5
21
22
5
3
都市部の工場数
1 2 5 10 20 50 100 200


1
5
16
14
14
1
1
56
12
12
3
1
1
2
1
1
3
1
2
3
農村部の工場数
1 2 5 10 20 50 100 200

れ以外の地域の工場新設も相対的には多くないため，ヤズド市の地位の低下はみられないというのが現実である。

なお，先にも述べたようにヤズド県内でもアシュケザルやザールチといった都市には工場が比較的存在している。例えば現在，『ヤズド州工業要覧』によれば，ヤズド工業総局の監督する繊維関連の工場は，アシュケザルには22，就業者数884となっている。また，ここには従業者規模50人以上の生産単位が六つある（内訳は，機械織り絨毯3，紡績2，毛布1）。

(2) ヤズド県外

先にみたように，ヤズド市への集中が緩和されたとは言い難いが，それでも県外の工場数は増加しつつある。統計の採り方と年度の違いから先の『センサス』とは数値が異なるが，1997年の各県の特徴を『ヤズド州工業要覧』(表10) から確認しておけば，タフト県に13 (従業者数合計381)，メフリズ県9 (同，308)，アルダカーン県4 (551)，メイボド県7 (504) となっている。

1工場当たりの従業者数の平均値は，ヤズド県の平均が63.5であるのに比べて，アルダカーン県とメイボド県を除けばいずれもこれを大きく下回っている。なお，アルダカーン県の数値は従業者数500名の工場（表8の32）を含

表10　ヤズド工業総局監督下の工場（繊維工業部門，1997年）

	工場数	従業者数	平　均	中央値
ヤ　ズ　ド　県	278	17,651	63.5	15
タ　フ　ト　県	13	381	29.3	17
メ　フ　リ　ズ　県	9	308	34.2	25
アルダカーン県	4	551	137.8	20.5
メ　イ　ボ　ド　県	7	504	72.0	12
アシュケザル県	22	884	40.2	17.5
ヤズド工業団地	6	402	67.0	45
ジャハナバード工業団地	4	152	38.0	36
ヤズド州合計	343	20,833	60.7	15

(出所)表2に同じ，より集計。

んでいるため平均値が嵩上げされている。また，メイボド県も組合員400名の生産組合を含むからこの組合を除した平均値はかなり小さくなる。

とはいえヤズド県にしてもけっして工場規模が大きいというわけではない。参考までに，各県の中央値を掲げておいたが，ヤズド県を含めていずれもかなり小さくなっている。なお，ヤズド県外に所在する従業者規模50人以上の工場（生産組合を含む）の実数は8にすぎない。

つまり，ヤズド県外で近代工場制工業部門に属する繊維工業はいまのところ工場数自体が少ない。よって，雇用源としてははなはだ心許なく，また産地というほどの規模にも達していないといえよう。なお，農村に所在する工場（農村工業）の管轄は，ジハード・サーザンデギー（聖戦建設省）が行っているが，これも数は少ない（注⒃を参照）。

(3)　工業団地（工業都市）

政府が工業に必要な各種インフラストラクチャーを整備して区画を分譲する「工業団地（工業都市）」という工業振興制度がある。これは，1983/84年度のイスラーム議会において批准されイラン工業都市会社が設立されたのがその嚆矢となる。具体的には，この会社は，工業都市（工業団地）の設立地点の調査・検討を行い，計画が策定されると，関係官庁の代表者から構成される会社の総会に諮られ，さらに計画批准のために閣議に送られる手順になっている（Daftar-e Arzesh-yābī-ye Vezārat-e Sanāye‘, 1993: 203)。

ヤズド州において，分譲が開始された工業団地は，現在のところ4カ所ある。すなわち，ヤズド，ジャハナーバード（メイボド県），アルダカーン，メフリズ工業団地である。分譲地の譲渡が開始されたのは1986年からのヤズド工業団地が最も古く，この工業団地の総面積は586ヘクタールと4カ所中最大であり，すでに285ヘクタール余りが分譲済みである。次いで，分譲が進んでいるのは，1991年に分譲が開始されたジャハナーバード工業団地であり，322ヘクタール中，110ヘクタールが分譲されている。しかしながら，ヤズド州工業総局が管轄する現在操業中の繊維関連工場で，このヤズドとジャハナーバー

ド工業団地に所在しているのは，前者に6，後者に4工場があるにすぎず，この工業団地という制度はヤズドの繊維関連工業に関しては寄与度が低いといわざるをえない。

2．ヤズド市外の小規模工場（作業所）の一事例

本章では，工場の規模と立地に着目して議論を進めてきた。従来から繊維・織物工業部門の集積があるヤズド市を除けば，産地という規模に達している地域はヤズド州には存在していない。はたして，ヤズド市以外に所在する小規模工場（作業所）とはどのような形態なのであろうか。最後にその一事例を参考までに示しておこう。

筆者は，1999年3月に，ヤズド州第3の都市であり，メイボド県の県都たるメイボド市を訪れた。97年度の『ヤズド州工業要覧』によれば，メイボド県に所在する工場は，生産組合を除いて六つ（従業者数104名）である。なお，生産組合の数値は，表8の⑬に示してあるように，組合員400名である。

特筆しておかなければならないのは，この生産組合は，「メイボド・ジールー協同組合」という名称が示しているように，ジールーという織物を主力として扱う組合であるということである。従来この地域では，家内制手工業によるジールー（平織りの綿製敷物）という特産品の生産が非常に盛んであり，一大産地を形成していた。現在，この織物の生産は衰退してしまったが[29]，このメイボド・ジールー協同組合⑬はいまなお，ジールーの生産・流通を一手に引き受けている。なお，組合での聞き取りによれば，現在のジールー生産者数は100名程度とのことである。

この生産組合では，ジールーの他に綿布類も商っている。その代表的な綿布はホッド・バーフと呼ばれる生産形態で生産されたものであり，これは織機購入資金のために銀行貸付（なお，運転資金は自己資金で賄う）の便宜を得て60年ほど前から増加した，小規模織工によって生産される製品である。(Majid-Zāreī, 1995: 133)。組合で確認したところでは，メイボド地域全体のホッド・

バーフの織機台数は400台程度で，織工数は250名程度，1台当たり日産50～60平方メートルの綿布やキャラコを生産するそうである。なお，『ヤズド州工業要覧』では，メイボド・ジールー協同組合（表8の⑬）に一括されているために，個別の工場としては数えられていない。

このホッド・バーフを行うメイボド市内の一作業所を訪れた。メイボド県を南北に貫くアジアハイウェー沿いには運転手相手の雑貨屋が並んでいるのだが，その連なりの1軒にこの作業所は所在していた。付近には雑貨屋ばかりでこの種の作業所は見られなかったから，一見するとこの立地は特殊である。

この作業所では電気動力でエスファハーン製織機を動かし，エスファハーン製の原料糸（綿糸）からガーゼや蚊帳などの薄手で非常に目の粗い布地を織っていた。作業所には，織機11台，緯巻機[30] 2台が装備されており，聞き取りによれば1台で1日に60メートル程度を生産することができるとのことである。なお，この作業所の創業は23年前（1355年度：1974/75年）であり，就業者は2人で，うち1人は経営者兼労働者である。

織機の台数からすれば，ホッド・バーフの工場としては大型の部類に入るだろうが，やはり零細な工業であることに変わりはない。この種のきわめて単純な織物生産がより高度な織物へと製品を転換していく可能性は乏しいように思われる。先に，ヤズド市を除外すれば織物産地の形成はみられないと述べたが，このメイボドのホッド・バーフはある程度の産地を形成しているようにも思える。しかしながら，手工業として一大産地を形成していたジールー生産に比べれば産地という規模にはみなし難い。しかも，ヤズド県やメイボド県を除けば，ホッド・バーフのような生産形態の作業場は少ない。電力の普及はホッド・バーフのような力織機を使用した小規模な作業所の設立を容易ならしめるはずであるが，今のところ一部の地域にしか現われていないのが現実である。

むすび

本章では，ヤズド州の繊維産業構造の実態を明らかにすべく，工場規模とその分布を軸にして論じてきた。さしあたり次のようにヤズド州の繊維産業の現状を要約できるであろう。

まずヤズド州は，全国レベルでみても繊維産業が盛んであり，特に綿・化合繊織物生産については，テヘラン，エスファハーン両州に次ぐ生産量を誇る。また州内部でも，全製造業部門のなかで，従業員数，付加価値生産額，その他の各面からみて最も重要な部門であった。

しかしながら，繊維産業部門の構造にはかなりの偏りがみられる。つまり，この部門の総工場数の3割以上を綿・化合繊織物部門が占め，次いで毛布織り部門が15%を占めている。このように織物部門への特化が強く，相対的にみて「川上」の紡績部門や「川下」の仕上げ部門や衣服縫製部門は弱い。つまり，その産業構造はさして広がりがあるとはいえない。また，部門間の不均衡な発展については当局もよく認識してはいるが，その対策は上手くいっていない。

次に，工場の規模を検討した結果，ヤズド州の織物・衣料品工業は，製品ごとの差異を考慮しても，各主力製品の傾向として，少数の大型プラントのみできわめて卓越的な生産能力を有していることが確認された。そして，残りの生産能力は比較的数は多いものの零細な工場から構成されていることになり，二極化の様相を示す。これは特に，工場数の卓越的な綿・化合繊織物部門で顕著であり，最大の2工場(しかも同一の経営下にある)のみで総生産能力の4分の1を占めていた。

また，工場の創業年次を検討した結果，最大規模の主力工場（従業員数500名以上）はパフラヴィー朝期に設立・計画されたものが中心であり，革命後20年を経た今日に至るまで生産能力その他にあまり変化がみられない。いまだヤズド州の織物工業の構造は前政権時代のそれに強く規定されている。

立地の側面の検討からは，工場の多くがヤズド市およびその近傍に集中しており，特に従業者規模10人以上の工場はヤズド県外にはきわめて少ないことがわかった。県外では，フローはまだしもストックでは工業の増加が進んでいるとは言い難い。そしてこれは，この部門が農村部の人口流出を防ぐ役割を果たしえていないことの証左でもある[31]。また，参考としてヤズド市以外に立地するメイボド地域の小規模作業所の一事例を示しておいたとおり，この種の作業所はきわめて零細である。こうした作業所や関連部門が，密な関係を相互に結んで産地形成ないし地域発展に寄与するかどうかの可能性は残念ながら今のところきわめて低いといえよう。

工場規模および立地の側面の検討からヤズド州の繊維工業のいびつさが具体的に明らかになったと思われる。わが国の事例であるが，北村（1986）は，本邦の地方の工業発達を評してそれを「もともと地方にあった在来・伝統的なものであり，分散的なものであったが……国民経済の一元化によって，特定の産地形成が進み，今日，地場産業といわれるようなものが全国各地に発展するようになった（13ページ）」としている。ヤズドの繊維産業を分析した限りでは，ヤズド市を除けば地方工業の展開が進んでいるとは言い難いし，欧州の低開発地域のような「工業地区」の存在も確認されなかった。これは，第1節で述べたように地域の諸資源の動員にかかわる問題にほかなるまい。そしてヤズドの事例は，イランにおける地方工業展開の動向の縮図を，ひいてはイラン国民経済の縮図を指し示しているのではないだろうか。

注(1)　日本の区分である300人以上の大工場，30～299人の中小工場，29人以下の零細工場と比べるとかなり小さいが，ここではイランの階級区分に従うことにする。なお，イランでは従業者数10人以上の工場が大工場とされる。

(2)　なお，この統計の「工場（kār-gāh）」という範疇には一部の例外を除いて，家内工業は含まれていない。つまり，住居の軒先に工場である旨を記して（「～工場」という看板を掲げて）生産活動を行っている場合は，「工場」として統計に数えられている。また，本章では工業省傘下のヤズド州工業総局（Edāre-ye

Koll-e Sanāye‘-e Ostān-e Yazd）が作成した『ヤズド州工業要覧』も用いるが，こちらの統計では生産組合に加盟する工場は，個別の工場とみなさず一つの生産組合に包括して集計がなされている。

(3) 製造業を含めた諸部門のテヘランへの集中については，Madanipour，1998を参照されたい。

(4) スペインの事例に関してはVazquez-Barquero (1992)，ポルトガルの事例についてはSilva (1992)を参照のこと。また，こうした論旨では，「工業地区(industrial district)」という概念が重視されるが，これは特定の各生産プロセスに専門化した中小企業の一団とその企業群が属する地域の共同体との相補的関与によって特徴づけられる一つの社会経済的・領域的統一体を意味する。この点に関してはイタリアのトスカナ地方について扱ったLeonardi & Nanetti (1994)を参照されたい。こうした議論はイランの事例に関しても参考になるものと思われる。

(5) わが国においても，地場産業あるいは零細産業の地域集団の役割が地方の工業発展のなかで重視されていることはいうまでもない。例えば，農村地域の工業発展について地場産業の役割を重視した研究としては，板倉（1981，1988），板倉・北村（1980）の諸研究を参照されたい。

(6) なお，パフラヴィー朝期と革命後の開発・発展政策の共通性については，Amuzegar (1993)の第9章を参照のこと。

(7) イランの統計では，「繊維」工業とされたり，「織物」工業，「織物，衣料品，履物」工業，「織物，皮革」工業などと表記が多様であるが，ここでは包括して繊維・織物工業（産業）とする。

(8) 一方，毛織物（毛布類を除く）の国内総供給量は，綿・化繊織物の3％前後にすぎず量自体は少ないにもかかわらず，自給率の向上は遅れ，毛織物の自給率が5割を上回るのは1341 (1962/63) 年になってからである (Sāzmān-e Barnāme, 1968: 34-35)。

(9) しかしながら，それ以降再び，消費が生産を上回る状況となった結果，輸入再開の必要が生じ，近年でもかなりの輸入を不可避としている（Vezārat-e Omūr-e Eqtesādī va Dārā'ī, 1994: 28)。

(10) 近年のイランからの織物関連の輸出高は，1995年の1.6億ドル，96年の3.7億ドル，97年の6.6億ドル程度にとどまる（*Iran Commerce*, 1998: 5-2, 12-13)。

(11) なお，イラン繊維産業史のアウトラインに関しては，岩﨑（1993）も参照されたい。

(12) 近年でもこれは当てはまる。Mohammad (1991)は，1974/75年および84/85年の工業関連の諸指標を分析して，先進，比較的先進，比較的後進，後進の4地域にイランの各州を区分しているが，この分析結果ではヤズド州は両年ともに，工業先進地域に区分されている。

(13)　一方，イランの主力毛織物工場は18工場と，綿織物（・化合繊織物）工場に比べれば数は少ない。そのうちヤズドに所在する工場は3工場であり，二つが公・国営工場で，残り1工場が私企業である。なお，全国レベルでも主要毛織物工場において純然たる私企業は3工場にすぎず，この部門は全国的に政府主導であった（Qarebāghiyān, 1994: 35)。

(14)　1970/71年時点で，綿・化合繊織物を生産する主力大型工場総数62のうち，8工場が政府系機関による運営であり，生産量は31％を占めた（Sādegī, 1977: 19)。それが，80年頃には，繊維部門における民間所有の工場は30％にすぎないまでになっている（*Iran Yearbook 88*, 1988: 431)。

(15)　例えば，テヘランの9工場のうち，純然たる私企業は2工場，エスファハーンの10工場では3工場にすぎず，しかもこうした民間企業は比較的小規模の工場に限られる。

(16)　1996/97年時点のヤズド工業総局が監督官庁となっている工場は1484にのぼり，農村工業の関係当局である聖戦建設省の監督下の59，鉱業総局監督下の四つと比較して圧倒的に多い（Edāre-ye Koll-e Sanāye‘-e Ostān-e Yazd et al., 1997: 3)。

(17)　なお，イランでは工場設立には，設立許可書（javāz-e ta'sīs）と操業認可状（parvāne-ye bahre-bardārī）の二つが必要とされる。前者の設立許可証は，(1)許可申請者による事前の事業化スタディー，(2)当該州の工業総局からの質問表の入手，(3)州の工業総局への質問表の提出，(4)州の工業総局による検討の後に，固定資産1000リヤールにつき0.5リヤール（最大100万リヤール）の国庫への支払い，という四つのプロセスを踏んで発行される。この許可が交付されて後に，機械・設備の設置が可能となる。一方，操業認可状は，設立許可証の所有者が工場の建設が完了し，稼動可能になった時点で受領しなければならない許可証である。このように，各州の工業総局は工場設立の直接の許認可権を握っている。また，設立許可証の有効期間は発行より1年間であるが，この延長に関しての権限も有している。

(18)　ここでの「工場」はあくまで，工場ベースであって，企業ベースではない。例えば，ヤズド・バーフ社（表8の⑦は，同じ敷地内に新しい生産設備㉖を隣接して設立したが，これは経営体は同じであっても統計上は別な工場として区分されている。

(19)　例えば，『1374年版』には個別工場の従業者数の記載がない。また，同一生産物であっても，しばしば生産量の単位の表記が統一されていない。

(20)　ここではあくまで，現在操業中の工場で，なおかつ統計にリストアップされた分を合計した数値を利用した。しかしながら，1997年時点におけるヤズド工業総局の監督下にある工場（生産単位）のなかで繊維工業部門の数は385であり，従業員数は2万3898人であるとされる。よって，実際の数値よりいくぶん

少ないことになる。

(21) 同一製品であっても重量で記載されたり，場合によっては面積で記載されているためである。

(22) 例えば，⑥シャルキャテ・ヤズド・バーフの実際の設立は，1956/57（1335）年である。

(23) イランにおける各期の経済計画については，Varjavand（1983）の第4章を参照のこと。

(24) この報告書では近代的な繊維部門としては，順にサージ，綿・化合繊織物，毛布，モケット・機械織り絨毯，紡績，染色，捺染・仕上げ，靴下，メリヤス服，下着，作業着，タオルが項目としてあげられている。なお，本報告では，手工業生産についても大規模工業同様かなりのページが割かれており，この部門の重視がうかがえる。

(25) なお，「モケット」と「機械織り絨毯」はともに機械織り敷物としてここでは一つに包括されて語られている。

(26) しかし，バースターン社のモケット生産は現在のところ実現をみていない。

(27) 再びヤズド州では1997年に長期的な工業計画，『1400（2021/22）年を視野に入れた州の工業の現状と展望（*Vaz'iyat-e Moujūd va Cheshm-andāz-e San'at-e Ostān dar Ofoq-e 1400*）』が発行された。これは，ヤズド州工業総局を含むヤズド州の工業を管轄する六つの関連機関（工業規格・研究総局，聖戦建設省農村工業部局，ヤズド工業都市会社，ヤズド手工業局，ヤズド工業・金属総局）の協力の下に策定された。

この報告書は，第1部の州の工業の現状分析，第2部の1400（2021）年までの予測についての2部構成であるが，第1部の現状分析の部分においても，多くの提案が挙げられている。多くは具体的というよりもむしろ工業一般についての政策提言ではあるが，「州の現存の工業，特に繊維工業の再構築と近代化のために必要な便宜と支援を準備すること（p. 27）」という提案も含まれている。次いで，工業発展の隘路としてもさまざまな点が認識されているが，その多くは，不適当な税体系や輸出関連の法律や規定の不安定，あるいは多様な使用税の支払い義務などといった政府の工業発展政策の欠如に関連するものである（p. 28）。

第2部では，工業生産額が7％成長した場合と9％成長した場合のシュミレーションがなされている。この数値を現在のそれと比較すると，繊維産業部門もそれ自体は大きな成長を示すものの，ヤズド州の工業に占めるその比重は，固定資産額を除けば，就業者数も付加価値生産額もシェアを低下させると見積もっている（pp. 55-70）。

(28) なお，メイボド県は1992/93（1371）年，アブルクーフ県は94/95（1373）年にそれぞれアルダカーン県と，タフト県から独立して県に昇格した。

(29) Janebollahi (1995)によれば，1978年時点では3000台のジールー織機があったとされる。

(30) 紡績工場から購入したスプール巻の綿紡績糸を，緯糸コップに巻返すための機械。織機のシャトルに緯糸コップを納めて製織するため，この作業が必要となる。

(31) 聖戦建設省や革命後の第2次5カ年計画においても地方の工業の発展については繊維・織物工業を重視している。しかしながら，この点は手工業や家内制工業の検討を含めねばならないため，範囲を限定した本章では踏み込まなかった。

〈参考文献〉

〈邦語文献〉

板倉勝高［1988］『日本工業の地域システム』大明堂。

板倉勝高・北村嘉行編著［1980］『地場産業の地域』大明堂。

板倉勝高［1981］『地場産業の発達』大明堂。

北村嘉行・井出策夫・竹内淳彦編［1986］『地方工業地域の展開』大明堂。

岩﨑葉子［1993］「イラン繊維産業概観—19世紀初頭からイスラム革命までの歴史的発展」（『現代の中東』第15号）61-75ページ。

〈外国語文献〉

Amuzegar, Jahangir [1993], *Iran's Economy under the Islamic Republic*, New York: Tauris.

Barkeshly, F. [1997], "The Role of Foreign Investment in Iranian Industrial Development," *Tārīkh-e Mo'āser-e Īrān*, 1-2, pp. 28-46.

Daftar-e Arzesh-yābī-ye Vezārat-e Sanāye' [1993], *Gozāresh-e Tahlīl-e 'Amal- kard dar Sāl-e 1371* [1371 (1992-93) 年度の実績ついての分析報告書], Tehrān: Vezārat-e Sanāye'.

Edāre-ye Koll-e Mohīt-e Zīst-e Ostān-e Yazd [1984-85], *Vaz'īyat-e Kār-gāhha-ye Bāfandegī-ye Shahr-e Yazd* [ヤズド市の織物工場の状況], Yazd.

Edāre-ye Koll-e Sanāye'-e Ostān-e Yazd [1985], *Sīmā-ye San'at-e Yazd* [ヤズド州工業要覧], Yazd.

Edāre-ye Koll-e Sanāye'-e Ostān-e Yazd [1992], *Sīmā-ye San'at-e Ostān-e Yazd Sāl-e 1370* [ヤズド州工業要覧 1370 (1991/92) 年版], Yazd.

Edāre-ye Koll-e Sanāye'-e Ostān-e Yazd [1995], *Sīmā-ye San'at-e Ostān-e Yazd* [ヤズド州工業要覧], Yazd.

Edāre-ye Koll-e Sanāye'-e Ostān-e Yazd [1998], *Sīmā-ye San'at-e Ostān-e*

Yazd Sāl-e 1376 [ヤズド州工業要覧 1376 (1997/98) 年版], Yazd.

Edāre-ye Koll-e Sanāye'-e Ostān-e Yazd et al. [1997], *Vaz'īyat-e Moujūd va Cheshm-andāz-e San'at-e Ostān dar Ofoq-e 1400* [1400 (2021/22) 年を視野に入れた州の工業の現状と展望], Yazd.

Floor, Willem [1991], "Traditional Craft and Modern Industry in Qajar Iran," *Zeitschrift der deutschen morgenlandischen Gesellschaft*, Bande 141-2, 317-352.

Gorūh-e Motāle'ātī-ye Hamūn [1986], *Motāle'e-ye Jāme'-e Touse'e-ye Eqtesādī* va Ejtemā'ī-ye Ostān-e Yazd [ヤズド州の経済・社会発展のための綜合研究], Vol. 7, Yazd: Vezārat-e Barnāme va Būdje.

Harātī, 'Abd-ol-hosein (ed.), *Sīmā-ye San'at*, 1997-98, Tehrān: Vezārat-e Sanāye'.

Iran Yearbook '88 [1988], Bonner Universitäts-Buchdruckerei, Bonn.

Issawi, Charles [1971], *The Economic History of Iran 1800-1914*, Chicago: University of Chicago Press.

Janebollahi, M.S. [1995], "A Survey of Zilu Weaving Techniques in Meibod," *Hands & Creativity*, No. 3, pp. 14-23.

Karshenas, Massoud [1990], *Oil, State and Industrialization in Iran*, Cambridge University Press.

Katouzian, Homa [1981], *The Political Economy of Modern Iran 1926-1979*, New York & London: New York University Press.

Madanipour, Ali [1998], *Tehran: The Making of Metropolis*, John Wiley & Sons.

Majīd-Zāreī, M.A. [1995], *Touse'e-ye San'atī-ye Shahrestān-e Meybod* [メイボド県の工業発展], Unpubl. M.A. thesis, University of Shahid Beheshi.

Markaz-e Āmār-e Īrān [1995], *Sar-shomārī-ye Omūmī-ye San'at va Ma'dan-e* Marhale-ye Avval-1373 [1373 (1994) 年度鉱工業センサス], Tehrān.

Ministry of Industry & Mines [1961], *Industry & Mines Statistical Yearbook 1960-1961 (1339)*, Tehran.

Mohammad, M.J. [1991], "Nā-barābarī-ye San'atī dar Ostānha-ye Mokhtalef-e Īrān"[イランにおける各州の工業不均衡], *Tahqīqāt-e Eqtesādī*, No. 43, pp. 85-102.

Qarebāghiyān, Mortazā [1994], *Tahlīl-e Hazīne dar Jahat-e Gostaresh va Sar-māye-gozārī dar Bakhsh-e Nassājī dar Eqtesād-e Īrān* [イラン経済における織物部門の拡大と投資に関する費用分析], Tehrān: Vezārat-e Omūr-e Eqtesādī va Dārā'ī.

Leonardi, Robert & Nanetti, Raffaella Y. (eds.) [1994], *Regional Development*

in a Modern European Economy: the Case of Tuscany, Pinter Publishers.
Sādeqī-Nāmvar, Ja'far [1977], *Tahqīq dar San'at-e Nassājī-ye Īrān*, Markaz-e Āmār-e Īrān, Modīrīyat-e Āmārhā-ye San'atī va Bāzargānī, Tehrān.
Sāzmān-e Barnāme [1968], *San'at-e Nassājī dar Īrān* [イランにおける織物工業], Tehrān.
Sāzmān-e Barnāme va Būdje [1995], *A Summary Report on the Performance of the Islamic Republic of Iran*, Tehran: Plan and Budget Organization, Center for Socio-Economic Documentaion and Publications.
Sāzmān-e Barnāme va Būdje [1976], Daftar-e Barnāme va Būdje-ye Ostān-e Yazd, *Barnāme-ye Touse'e-ye Eqtesādī va Ejtemā'ī-ye Ostān-e Yazd* [ヤズド州の経済・社会発展計画], Vol. 1, Yazd.
Sāzmān-e Barnāme va Būdje-ye Ostān-e Yazd [1998], *Āmār-nāme-ye Ostān-e* Yazd 1375 [ヤズド州統計書　1375 (1996/97) 年版], Markaz-e Āmār-e Īrān.
Sāzmān-e Barnāme va Būdje-ye Ostān-e Yazd [1998], *Gozāresh-e Eqtesādī va Ejtemā'ī-ye Ostān-e Yazd Sāl-e 1375* [ヤズド州の経済・社会報告1375 (1996/97) 年版], Yazd: Sāzmān-e Barnāme va Būdje-ye Ostān-e Yazd.
Sherkat, Kāzem [1963], *Barrasī-ye San'at-e Nassājī-ye Nakhī-ye Tabī'ī va Masnū'ī dar Īrān* [イランにおける天然・人造繊維製織物についての研究], Tehrān: Bank-e Touse'e-ye San'atī va Ma'danī-ye Īrān.
Silva, M.R. [1992], "Development and Local Productive Spaces: Study on the Ave Valley (Portugal)," in *Endogenous Development and Southern Europe* (ed. Gioacchino Garofoli), Avebury, pp. 117-130.
Singleton, J. [1997], *The World Textile Industry*, Routledge.
Varjavand, R. [1983], *Economic Development under Public Enterprise: the Case of Iran*, Unpubl. P.D. thesis, The University of Oklahoma.
Vazquez-Barquero, A. [1992], "Local Development and the Regional State in Spain," in *Endogenous Development and Southern Europe* (ed. Gioacchino Garofoli), Avebury, pp. 103-116.
Vezārat-e Omūr-e Eqtesādī va Dārā'ī [1997-98], *Gerd-āvarī va Tanzīm-e Āmārhā-ye Eqtesādī-ye 1338-1374* [1338-74 (1959/60-1995/96) 年の経済統計集], Tehrān.
Vezārat-e Sanāye '[1997], *'Amal-kard-e Tarhhā-ye Nassājī va Charm az Sāl-e* 68 tā 75 [1989/90～1996/97 (1368～75) 年期の織物・皮革部門における計画実績], Tehrān: Edāre-ye Nezārat bar Ejrā'ī-ye Tarhhā-ye Nassājī va Charm.